

〔県民局だより〕

和牛増頭の一翼を担う孝本牧場

備前県民局畜産班

○はじめに

孝本牧場は吉備中央町にあります。吉備中央町は元々農業が盛んで、なかでも水稻、果樹そして畜産が主な産業となっています。畜産のなかでも特に和牛繁殖牛はここ数年増頭している地域で、平成17年度から平成20年度までの3年間で119頭も増加しています。今回はその増頭の一翼を担う農家として、堅実に牛を増やしてきた孝本牧場を紹介します。

年度	吉備中央町		備前局管内	
	繁殖雌牛頭数	増頭数	繁殖雌牛頭数	増頭数
H17	273		454	
H18	301	+28	454	±0
H19	334	+33	525	+71
H20	392	+58	614	+89

○肥育経営から繁殖経営へ

昭和50年頃、黒毛和牛を中心とした肥育経営農家として孝本牧場は始まりました。当時は父、一郎さんが農協へ働きに出ながら、5、6頭の肥育牛を丁寧に仕上げて行く毎日でした。その生活は平成6年まで続きましたが、その年に一郎さんの病気により肥育経営を断念することとなります。

転機は2年後に訪れます。一郎さんが病気から復帰し、今度は繁殖経営として再開することになりました。繁殖農家としての一步は、市場での子牛3頭の購入からでした。同じ年、もう数頭購入し、その時購入した牛のうち一番古い牛（平成5年生まれ）が今でも現役牛として頑張っています。

○繁殖経営の難しさ

最初は子牛を飼うことの難しさを痛感したそうです。白痢がひどく、後継者の真二さん曰く「親につけてたから、葉は飲まないわ、大変だった（笑）」。人工哺乳にしてから少しずつ減り、試行錯誤するなかで着実に事故は減っていき、去年は奥さんの指導もあってか（平成19年2月にご結婚）、とうとう事故率ゼロになりました。「嫁さんに相当怒られたし（笑）、哺育は向こうの方が上手い！」と真二さん。

○現在の取組

平成14年から受精卵移植に取り組み始め、平成17年からは酪農家との連携のもと、借り腹による受精卵産子を生産し、現在では年間20頭前後が酪農家から戻ってきています。あまりにも多数戻ってくることやこれまでの増頭で繁殖牛舎が手狭になったことから、昨年度は「担い手育成総合整備事業」を活用し、30頭規模の繁殖牛舎、30頭規模の育成牛舎を増築されました。新しい牛舎は構造も最新で、その効果は単なる増頭だけではなく、牛たちが落ち着き、さらに作業性の向上が、自分自身の「やる気」に繋がっているそうです。

平成16年から行っている稲わら収集は、自己所有地や近隣の水田、さらに総社市での収集面積も含めると現在では7haに達しています。また、自給飼料を集める一方で、牛が受胎すると放牧場へ放し、極力飼料コストを低く抑えています。



(新しい繁殖牛舎)

さらに、真二さんは人工授精の免許を取得し、自農場はもちろん、近隣の農家にも種付けで走り回り、今では少なくなった人工授精師の一人として地域の

なかで貴重な存在になっています。

このような取組により、子牛3頭で始まった繁殖経営が現在では繁殖雌牛47頭、未経産牛7頭、子牛47頭を数えるまでになりました。(H21.8.1 家畜保健衛生所 頭羽数調査より)

○最後に

孝本さんに今後の目標を聞いてみました。「子牛の育成技術、資質向上。それから取組を維持していくこと。」維持するだけでも大変そうですけど・・・。

孝本さんの事務所の壁には1歳8ヶ月になる娘さんの写真が貼ってあります。「大きくなって手伝ってくれるようになると楽しいですね」と言うと、「今でも手伝ってくれるよ。餌を飼槽に入れたり、通路に蒔いたり (笑)」

